

【広島・福山】 ホームを拠点としたインターローカルな活動

活動拠点としてのホーム 福山市

私が生まれ育った福山市は広島県の東端に位置する中核市で、広島県内では広島市に次ぎ2番目となる約46万人の人口を擁する都市である。広島＝広島市という一括りにされがちであるが、福山市は広島市と距離にして約100kmと離れており、古くから備後国として西は尾道市・三原市から東は隣接する岡山県井笠地方を含む備後都市圏の中心都市である。このような歴史的・地理的背景から広島市と別の独立した経済圏を確立しながら固有の文化が育まれてきた地域でもある。そして方言においてもその違いが見いだせる。よく広島弁とされるのは県西部の安芸弁の方であり、東部は備後弁である。一般的に接続助詞は安芸弁では「じゃけん」であるが備後弁では「じゃけ〜」といった感じで微妙なようでアクセントなど大きく違う。

豊かで安定した自然環境

福山市は瀬戸内海式気候に属し、県内でも降水量は少なく年間約1,200mmであり河川の流量が少ないのが特徴である。海と山がとにかく近く、多くの島が点在する瀬戸内海の眺望は天候が良いと四国山脈まで見渡せる。また歴史上大きな地震被害もなく近年までは地震空白域とされており、台風の大きな被害もない比較的自然災害が少ない土地柄でもある。

中心市街地の再開発と遺構

現代の主な交通手段のひとつである鉄道が大きく変わらない限り、駅はその街の最初の印象を与える場所である。そう考えると特徴のない駅前風景がいかに多いことか……そういった観点では、福



写真1 外堀を東西に横断するJR福山駅



図1 福山城遺構を活かした水辺公園プロジェクト

山駅はホームから間近に福山城本丸を望むことができる特異な駅だ。これは城の外堀を東西に横断する形でJR福山駅が通っているからである(写真1)。しかし昭和初期までに全ての堀は埋め立てられ時代の波と共に遺構の破壊が進み、現在では城郭一帯の歴史の面影が感じられにくい状態となっている。2016年に福山市制施行100周年を迎えるにあたり福山駅前整備事業が進められた7年前、埋め立てられた石垣が発見され福山城遺構を活かした水辺公園プロジェクト(図1)の声が市民団体から沸き起こった。駅舎によって城郭一帯を南北に分断されたが故に、生み出すことができるユニークな駅前計画だ。この提案は結果的に実現することなく石垣の調査後、計画通り現在(写真2)の駅前となる残念なカタチとなった。なぜならば、特別に新しいものをつくるのではなく歴史という時間をカタチにすることこそ福山駅前のアイデンティティをつくりだせたのではないかと思うからである。しかし全国に目を向けると長崎市では埋め立てられた出島を100年かけて復元整備している事業もあるように、長期的な視点で福山中心市街地の姿を今後も考えていかなければならないと思っている。

中心市街地の賑わいと商店街の未来

中心市街地についてはもうひとつ、昨今の郊外型ショッピングモール進出による中心部のアーケード商店街の衰退が挙げられる。県庁所在地にある商店街は賑わいを維持しているようだが、そうでない地域の商店街アーケードは往々にして疲弊している。福山市の商店街も例外ではない。なかでも江戸時代から城下町に形成された商人町「とおり町」の名で親しまれた全長430mもある歴史あるアーケードもご多分に漏れずシャッター街に



写真2 現在の福山駅



写真3 シャッター街が進む福山本通商店街

なりつつある。この商店街はJR福山駅から徒歩5分の場所にあり、私が小さい頃は実に賑わっており、そこへ行くのを楽しみにしていたアーケード街である。近年、このアーケードもシャッターを下ろしていくスピードが年々加速している。このように廃れ始めている中で、こちらも2016年の福山市制施行100周年を迎えるのに合わせてアーケード商店街再興の機運がある(写真3)。

現在、このアーケード商店街再興プロジェクトにわれわれが関わっているのでここで少し触れたい。私たちの事務所に話がきたのはもう3年半ほど前である。組合理事の方によると「電柱をなくして地中化する」「同時にアーケードも取っ飛ばせば町並みがきれいになるのではないか」という話もあったようだが、最終的には電線地中化の目処は立たず今後アーケードを残すべきかどうかという相談が始まりであった。このアーケード街の課題を整理すると次のようになる。

- ①アーケード老朽化による美観の損失
- ②顧客の減少
- ③商店街としての衰退

約100店舗のうち3分の1がシャッターを下ろしておりアーケードの天蓋部分をなくしてしまうと、連帯感も希薄となり徐々に住宅街化していくことが予想される。福山市のような地方都市における商業施設は車で行けるとこでないとなれば繁盛するのが難しい状況であり、つまり駐車場を確保できることが商売を維持するための条件となっている。しかし街中で古くから軒を連ねた小さな商店街という集合体は特異であり、ひとつの箱に多数のテナントがあるよりもトオリを歩き



図2 商店街再興完成予想図

ながら買い物ができる楽しさや、気持ち良さを再認識できる環境が重要だと考えた。単にアーケードを取り払うのではなく、何か賑わいの環境が生み出せないかという思いから組合理事や商店主の方々と幾度もヒアリングしながら提案をまとめてきた(図2)。

現在このプロジェクトは、福山市の行政や多くの関係機関にも積極的に関わっていただきながら大きな山場を迎えようとしている。順調に進んでいけば2016年7月に新たな環境として商店街アーケードが再興する予定である。商店主の方々の要求の基本は自分の店の商売だが、少し広い視点で自分たちの街全体を生かしていく方向へ一緒に持っていかれたら良いと考えている。ハードを整備すれば何かが変わるという幻想を抱かず、一人ひとりの街を思う気持ちと行動が持続可能な状況を生み出すということを認識し、互いに思考し続けていかなければならない。

歴史ある潮待ちの港町

福山市の南端に位置する港湾、^{とら}鞆の浦。古くから潮待ちの港として繁栄し



写真4 鞆の浦(広島県福山市鞆町)



写真5 改修前の外観



写真6 80年前の環境を再生した後山山荘

た。というのも瀬戸内海の海流は東西の紀伊・豊後水道から流れ込み、鞆の浦沖を境に潮の流れが逆転することが理由である。古い町並みや街路も現存し、江戸時代の港湾施設である「常夜燈」「雁木」「波止場」「焚場」「船番所」全てが残る唯一の港である。景観も素晴らしく朝鮮通信使の寄港地にも指定され「日東第一形勝」と賞賛されるほどの風光明媚な地域である(写真4)。

ここにおいても少子高齢化や産業の衰退、現代の車社会における通行の利便性など……時代の波は押し寄せた。今から30年ほど前に港の両岸を埋立て橋梁によって結ぶ県道のバイパス計画が浮上した。この計画の是非を巡る議論や論争、そして裁判が長い間続いた。現在この架橋計画は県が中止する意向を固め山側で道路整備を進める協議をしている。不便という価値観に対して工夫することで古くからあるものを活かす英断だと思っている。

過去からの明珠を未来につなぐ

福山市出身の建築家に武田五一、藤井厚二がいる。現在の福山市章のデザインは武田五一によるものである。また、藤井厚二の実兄である藤井興一衛門の別邸が鞆の浦にあり5年前発見された。そこに佇んでいた瓦解寸前の廃屋に藤井厚二が設計した痕跡が残されていた。それは京都大山崎にある聴竹居のサンルームに酷似していたからである(写真5)。この敷地を購入された新たな施主からの依頼でわれわれは福山市に唯一残る藤井厚二の建物を活かしながら、新たにコンバージョンすることにした。設計に3年・工事に1年を費やし2013年10月に80年前の環境を再生した(写真6)。この「^{うしろ}後山山荘」を再生するまでの4年間の長い時間と多くの方々と協働のプロセスは割愛させていただき、ここでは竣工後の利活用の活動について少し触れたい。後山山荘は個人の別邸として新たに再生し

たものであるが、施主が利用しない時期の活用方法も要望として挙げられていた。そのため竣工後から聴竹居倶楽部の代表である松隈章氏をはじめ多くの方々の協力を経て2014年9月から後山山荘倶楽部を発足し、月1回の一般公開に漕ぎ着けた。後山の中腹に佇む「後山山荘」からの素晴らしい景色と80年前からの環境を再生した取り組みを知っていただき、多くの人に大切にされる場所になってほしいと願っている。さらに今後、鞆の浦という歴史ある町並みと共に関わっていければと思う。

地域と密接に関わりながら 50年・100年先を描く

現在の成熟した日本の社会だからこそ、様々な地域の特性が顕在化し、本当の意味で豊かな状況が生み出せるのではないかと感じている。しかしながらモノや情報は溢れ利便性が加速していくことに反して、人の心はますます貧しくなっていくのではないかと感じる。グローバルな社会を俯瞰しながらそれぞれの地域にある価値観に気づける豊かな心が、今問われているように思える。中長期で街に関わっていく一朝一夕ではない取り組みこそ、身近な地域で活動する建築家の役割である。その人と人との関わりの中に次代へつなげていくバトンがあると思っている。

「明珠掌在」という好きな禅の言葉がある。計り知れないほどの価値は、すでにあなたの掌にあると教えてくれている言葉。日々の小さな気づきを大切にしながら、今後もホームである福山市を拠点にインターローカルな活動をしていきたいと思う。



前田圭介(中国支部/UID)